

「2019年1～5月のかつお一本釣り漁業における漁況と近年の動向について」

—経営流通部—

本県の基幹漁業であるかつお一本釣り漁業は、北上するカツオ魚群を追って中南洋から東北沖合まで漁場を展開し、近年は不漁であったカツオに代わり、上半期はビンナガ主体の操業によって漁獲を上げるという操業形態が取られています。このような中、今年1月～5月(以下、「今期」という。)にかけて、特徴的な操業実態が捉えられたことから、今期における漁況としてまとめました。また、近年のかつお漁業の動向についてもお紹介します。なお、以下に引用する漁獲量は、QRY情報(漁船間無線連絡資料)に基づくものであり、総漁獲量とは異なる点にご留意下さい。

1 今期のカツオ、ビンナガ漁況

今期の本県所属かつお一本釣り漁船によるカツオ漁獲量(図1)は3,199トンで、前年同期(2018(平成30)年1～5月(4,822トン))比66%、過去5カ年^{※1}同期(2013～2017(平成25～29)年1～5月平均値(5,587トン))比57%でした。

ビンナガ漁獲量(図2)は1,311トンで、前年(2,910トン)比45%、平年(2,285トン)比57%と、ともに大幅な減少となっています。

※1 過去5カ年(2013～2017年)の平均値を「平年(値)」とした。

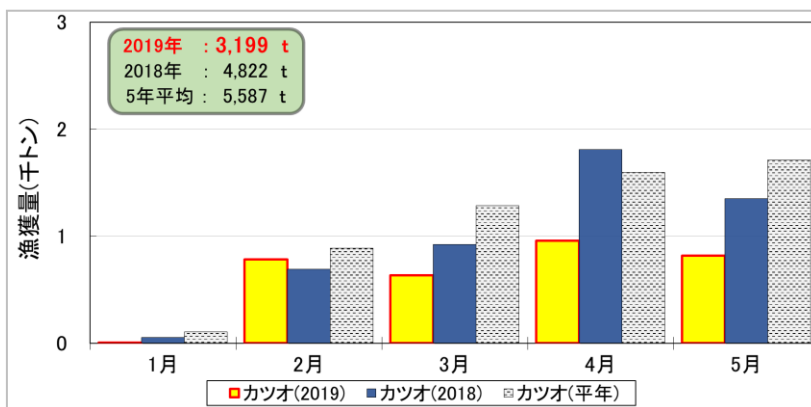


図1 カツオ月別漁獲量の推移

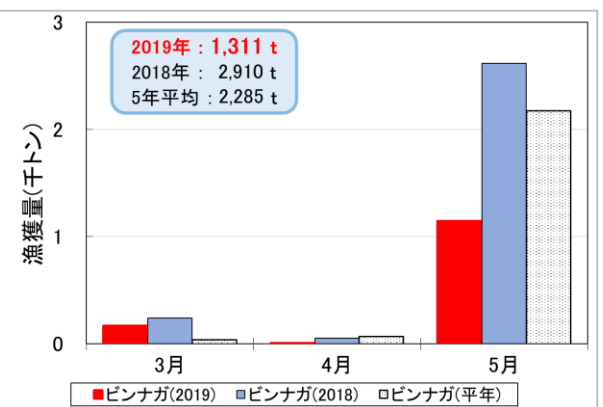


図2 ビンナガ月別漁獲量の推移(3～5月)

次に、CPUE(単位努力量^{※2}あたり漁獲量(単位: t/隻・日)の月間平均値)、総努力量^{※3}の推移から見てみます。

カツオのCPUE(図3)は、北緯25度以南に漁場が形成された2月は5.0t/隻・日と高かったものの、3～5月は約3t/隻・日と、低い水準で推移しています。

月別総努力量(図3)は、2～4月に近海における漁場形成の活発化に伴って増加傾向となり、5月にはビンナガ主体の操業へ移行が進み、相対的にカツオの有漁隻数が減少する、例年と同様の傾向を示しながら、量的には全ての月で低い水準となっています。

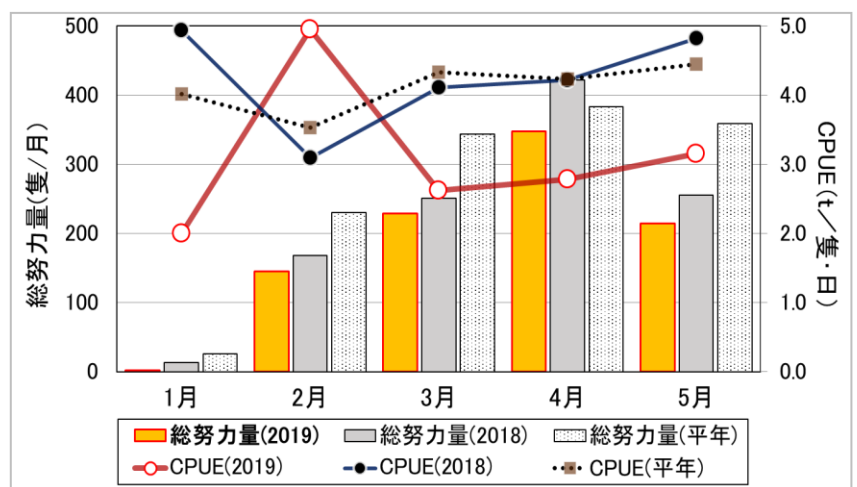


図3 カツオ CPUE と月別総努力量の推移

※2 単位努力量: 出漁している漁船のうち、漁獲のあった漁船の、一日あたり延べ隻数(一日あたり延べ有漁隻数)。

※3 総努力量: 単位努力量の累計(本稿では月間累計値)。

カツオの CPUE、総努力量は 3 月以降低い水準で推移しており、近海における漁場形成がされないことで出漁に歯止めが掛かり、また、操業が行われても漁獲が伸びない状況が続いたことが考えられます。

ビンナガの CPUE は、伊豆半島沿岸海域に短期間、漁場が形成された 3 月には高い値を示し、4 月には大幅に減少しました。5 月はビンナガ主体の操業に移行が進み、4.1 t/隻・日にまで増加したものの、例年、前年を下回りましたが、一方、同じく 5 月に増加した月別総努力量は前年、平年を上回る結果となっています。

例年、5 月以降に盛漁期となるビンナガの漁場は、房総沖から東経 140° 以東に及ぶ広範囲に形成されますが、今年、同海域では漁場形成がほとんど見られず、5 月は、熊野灘沖から伊豆半島沖の、主に黒潮大蛇行の内側域でカツオ、ビンナガ両種を狙う短期間操業が中心となりました。このため操業頻度は高くなり努力量は増加しましたが、狭い海域に出漁が集中し、また小規模な漁場形成が多かったことから、CPUE は前年、平年の半分以下という低い水準となりました。

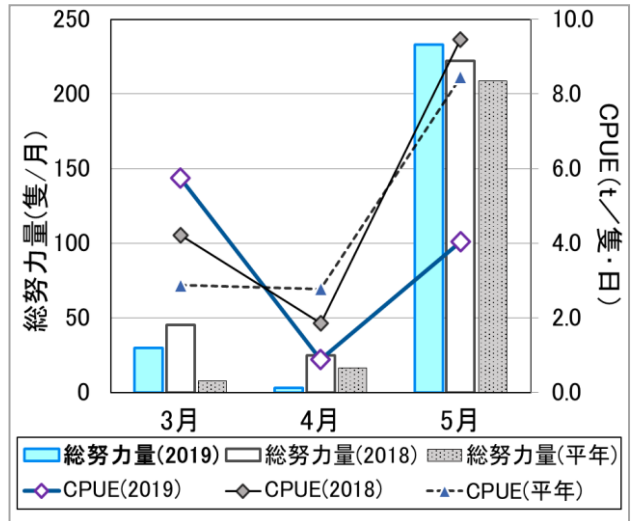


図4 ビンナガ CPUE と月別総努力量の推移

2 近年の漁況の推移

近海かつお一本釣り漁業における 2013～2019 年のカツオ、ビンナガ漁獲量、CPUE (年平均値) の年ごとの推移を見ると、カツオ漁獲量 (図 5) は、約 1 万 8 千トンであった 2013 年を除き、概ね約 1 万 2 千トン前後を維持しており、CPUE は、約 4～5 t/隻・日の範囲内で推移しています。

一方、ビンナガ漁獲量 (図 6) は、約 9 千トンであった 2013 年以降減少傾向にあり、2016 年に一時 5 千トン以下に減少し、2017 年以降は約 6 千トン台を維持しており、CPUE は 2016 年を底として増減を繰り返し、年変動が大きく不安定な推移を示しています。

次に、漁獲量を 1～5 月と 6 月以降に分けて見ると、カツオ、ビンナガともに、漁獲量だけでなく漁獲時期の年変動も大きくなっています。

今年 5 月末時点でのカツオ、ビンナガ漁況は、近年になく低調なものとなっており、これには漁期始めの日本近海の水温上昇の遅れや黒潮の蛇行などの海況条件が、資源の来遊の遅れや、漁場形成の不調に影響した可能性が考えられ、引き続き、資源状況や漁場形成について注意深く観察していく必要があります。

なお、6 月 28 日に水産庁が公表した「令和元年度常磐・三陸沖かつお長期来遊動向予測 (6 月～11 月)」では、今年 6 月以降の来遊量は「昨年及び過去 10 年間平均を下回る」と予測されました。

また、過去の体長組成の季節的推移から、カツオが南下する 9 月～11 月には、体調 54 cm 前後、体重 3kg 前後の個体が中心となる模様です。

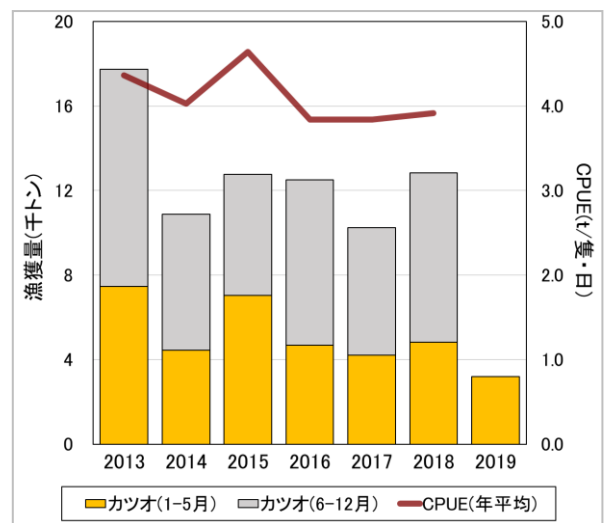


図5 カツオ年間漁獲量、平均 CPUE の推移

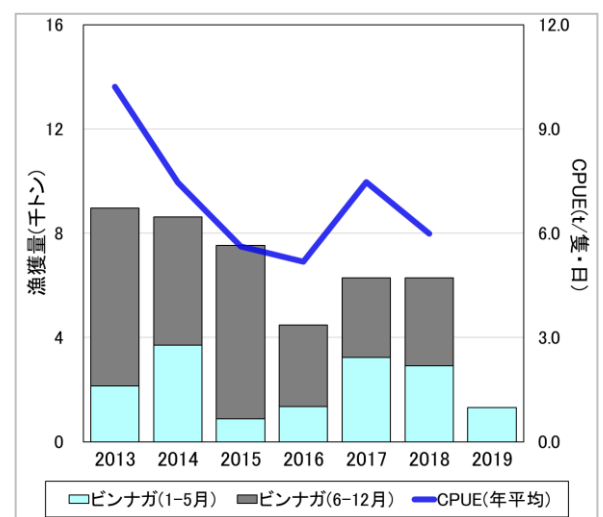


図6 ビンナガ年間漁獲量、平均 CPUE の推移